

令和8年度 鳥取県立農業大学校評価システムシート（当初）

ミッション	次代の農業を担い、指導的役割を果たす人材の育成・確保
重点目標	○学生・研修生の円滑な就農の支援（個別指導の強化及び関係機関との連携による自営就農及び雇用就農の支援強化） ○実践的な生産工程管理を学ぶ ○学生に寄り添った相談・教育支援体制の強化

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
1	学生・研修生の確保	1 農業大学校の魅力発信	1 過去5年間では、令和3年度入学のみ定員30名を確保したが、それ以外は定員割れとなっており、令和8年度入学は定員に対して73.3%であった。 年2回開催のオープンキャンパスの参加人数は昨年に引き続き多く、また令和8年度入学の受験者数は前年度より増加してきているため、引き続き、県内高校との連携、進路ガイダンス等への積極的な参加、HP等による情報発信の充実が必要である。 <年次別入学者数> R3:30名、R4:18名、R5:23名、R6:19名、R7:19名、R8:22名 <年次別オープンキャンパス参加者数> R3:18名(2回目中止)、R4:24名、R5:30名、R6:41名、R7:38名	1 ・入学志願者数の定員数確保	1 ・オープンキャンパス(2回)の開催、学校ホームページの更新による魅力発信 ・農業系高校等と連携した取組の実施 ・農業系高校を中心とした県内高校訪問 ・在校生・卒業生がいる普通科高校訪問 ・各高校で実施される進路ガイダンスへの参加 ・農業大学校訪問の受入れ（随時）
		2 農業高校との連携による学生確保	2 農業高校3校（智頭農林、鳥取湖陵、倉吉農業）の農業クラブをオープンキャンパス時に受入れ、3校出身の本校学生との交流会を行っている。（R8より、農業クラブとしての受入は中止） <年次別参加者> R1:6名、R2:12名、R3:9名、R4:5名、R5:3名、R6:8名、R7:4名 スーパー農林水産業士を志向する生徒の食の6次産業化プロデュースー育成講座への受入を行っている。 <年次別受講者数> R1：46名、R2:15名、R3:24名、R4:19名、R5:32名、R6:32名、R7:14名	2 ・高大連携の実施 ・高校訪問の実施 ・食プロ育成講座の実施	2 ・オープンキャンパスでの農業高校と先輩学生との交流 ・倉農等と農高農大一貫プロジェクトの実施 ・スーパー農林水産業士に係る食プロ育成講座受講受入れ ・県内農業系高校訪問による農業大学校の紹介
		3 IJUターン就農者の掘り起こし	3 東京、大阪で開催される移住フェア、新農業人フェアに、また、令和5年度からは県内でも開催された就農相談会に参加し、就農を目指す一般社会人が事前に進路相談できる機会を提供し、相談に応じている。		3 参加可能な東京（4回）・大阪（3回）等で開催される県外就農相談会、県内（倉吉、西部、北栄）で開催される就農相談会を通じて就農のための道筋や支援制度の紹介し、就農希望者の掘り起こしを行う。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
2	着実な就農	1 求人・求職者情報の就農支援関係機関との共有による就農の促進	1 近年、非農家出身学生が約7割を占める中、農業法人等からも求人が増えており、雇用就農による就農が増えている。 <年次別就農率> R3:62%、R4:56%、R5:50%、R6:60%、R7:59% (5か年平均 : 57.4%) <年次別就農+農業関係機関就職率> R3:76%、R4:92%、R5:86%、R6:85%、R7:76% (5か年平均 : 83%)	1 学生の就職希望者に対する就農率及び農業関係機関等就職率: 80%以上	1 就農支援関係機関（ハローワーク等）との情報共有 - 雇用就農相談会による農業法人等求人者および求職者のマッチング - 県内地元就農を目指す学生の就農地農業関係機関等との意見交換会の開催 - 学生の就農・就職意識の早期啓発と積極的な現場体験の実施
		2 研修生に対する的確な進路指導の実施	2 社会人向け研修制度として運営している各種研修制度の趣旨はそれぞれ異なり、研修生の受講目的も様々である。就農実現に向けては、制度ごとに研修生のめざす目標を踏まえつつ、個々の背景やレベルに即した指導及びアドバイス、研修進捗状況をおさえながらタイムリーに関係機関との調整を実施していくことが極めて重要である。	2 研修生の就農率: 100%	2 各研修において、研修開始時・終了時のみならず、研修期間中の個別面談等を複数回実施しながら、各研修生に適した進路・就農方針に関するアドバイス、必要な関係機関との調整を実施する。
3	教育環境の改善と学生支援体制の強化	1 学生に寄り添った相談体制の強化	1 農業大学校に入学してくる学生について、非農家出身や農業系の学校以外からの入学生が増加しており、実態が多様化している。それにともない、個々の学生を理解したきめ細かな対応が必要となる。	1 カウンセリングの動機づけ 1回 教育相談専門員との面談 全学生2回以上	1 多様化している個々の学生に対して寄り添った対応を取るために次のことを実施する。 - 教育相談専門員の配置 - カウンセリング体制の充実 「全職員相談窓口体制」の構築 - 舎監との情報共有の強化 - 学生からの意見、要望をふまえた改善 - 相談室の設置
		2 指導職員の資質向上	2 職員は普及指導員としての資格を有しているが、教育関係等の知識及び技能を十分に習得していない。そのため、多様化する学生の実態に対応するための資質向上が求められる。	2 教育センター研修の受講回数: 延べ受講回数3回 ミニ研修会の実施: 年間5回以上	2 教育関係等の資質向上のために、次のことに積極的に取り組む。 - 教育センター研修の受講 『エール』鳥取県発達障がい者支援センターによるコンサルテーション実施（客観的な指標に基づく学生対応） - 職員会、科長会でのミニ研修会の実施（本校の学生の実態に即した内容を企画）

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
4	学生の総合的経営能力の向上	1 学生個々の状況に応じた個別指導の充実	【養成課程共通】 1 学生の就農意欲や体力、学力には幅があり、専攻実習での技術習得には個々の能力・スピードに応じたきめ細やかな指導が必要である。 2 挨拶や報告・連絡・相談を徹底するとともに、実習では作業精度だけでなく効率性なども意識することが重要である。	1 ・理解度アンケートに応じた個別指導	1 各コース毎に「理解度アンケート」を実施し、農業技術や農作業安全に対する知識の習得状況について学生と職員の共通認識を図る。学生の苦手分野の克服、作業時間を含むコスト意識を醸成するための指標として活用する。 理解度アンケートの実施（7月、11月の2回）とそれを基にした個別指導（随時）
		2 計算能力を含めた基礎学力の向上	2 営農技術のなかには、圃場面積の計算、施肥量の決定や農薬の希釈など、計算能力が求められるが正確に計算できる学生が少ない。	2 ・1年生学力補完講座（合格水準達成率：100%）	2 1年生の基礎学力（計算、単位など）を把握し、学力補完のための補講を行う。また、1・2年生とも専攻実習で、実践的に肥料・農業計算を実施する。 ・1年生学力補完講座（25回） ・学力テスト（随時） ・専攻実習時の実戦力評価（随時）
		3 幅広い農業知識の習得と販売実習による経営感覚の向上	3 多様化する農業形態の中で営農するために、コースの枠を超えて幅広い知識と技術を身につける必要がある。またモノを作るだけでなく、「売る」ことも意識させることで経営感覚を持った農業者を育成する必要がある。	3 ・「校内技術競技」及び「流通販売実習」の効果的な開催	3 「校内技術競技」を行い、各コースから出題される問題（筆記・実物鑑定）を解きその点数を競う。また、修農祭や校外で「流通販売実習（年4回）」を実施し、商品PR方法などを学ぶ。対面販売を行うことで消費者ニーズを把握するとともに、接客方法を学び、生産販売に活かす。学生主体で企画、準備、運営を行うことで、就農後の店舗販売や自家農場のPR手法を学ぶ。さらに、修農祭来場者にアンケートを実施し、次期開催等に活用する。
		4 地域で頑張っている卒業生等を訪問して自己の就農意欲を高める	4 非農家出身の学生割合が高くなってきていることから、地域で頑張っている農業者等を訪問し、就農・農業法人就職等に向けた意識付けが必要である。 ＜非農家出身入学者数の推移＞ R4:67%、R5:65%、R6:74%、R7:68%、R8:82% （5か年平均：71.3%）	4 ・各コースの現地視察回数（2回以上）	4 農家・卒業生等の訪問・視察（各コース2回以上）
		5 GAPに関する講義の継続及びR6認証の取得	5 近年、農業のグローバル化や食の安全意識が高まっており、生産工程を管理する手法（GAP）の教育が必要となっている。	5 ・GAPの継続した取組（果樹、野菜、花き、作物、畜産コース）	5 ・グローバルGAPに特化した講義について1年生を対象に年8回実施 ・各コースでGAPの管理基準に基づく取組みを行いながら、適宜見直しを行い必要に応じて改善を行う。 ・成果目標として、果樹、野菜、花き、作物コースはグローバルGAPの取組み、畜産コースはJGAPの取組みを継続して行う。また、その取組みについて、第三者（外部部講師）が年1回審査を行う事で、基準に適合した取組みが維持できる。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
5	学生の専攻営農技術の向上	【果樹】 1 ほ場管理に係る主体性、責任感の醸成	1 非農家、普通高校卒の学生が大半を占め果樹に関わってきた学生は少ない。 永年作物である果樹の栽培技術を2年間の限られた期間で習得する事は困難である。よって、技術習得を図るためには、学生が主体的に責任感を持ってほ場管理を行わせる必要がある。	1 「1,2年共通」 理解度アンケートでほ場作物の管理等に関する項目について、職員評価で「できる」以上が80%以上 「2年次」 ・作業説明の評価として学習チェックの活用	1 「1,2年共通」 1人に1樹「J-World 二十世紀」の担当樹を割り当て、2年間を通して栽培管理を行わせる。 ・担当樹の栄養診断（6月） ・月刊誌「因伯之果樹」の読み合わせ（毎月） ・技術検定2級に向けた勉強会の実施 ・担当樹の栄養診断、果実調査等のレポート作成 「1年次」 ・農薬、施用肥料量の計算（2年生の補助） ・農業機械の操作及び管理方法の習得（刈払機を各人に割り当て） ・2年生プロジェクトを補助し調査方法を習得 「2年次」 ・新たな農作業に向かう前に担当学生により、資料により目的、方法等の説明、現場は実演をして他の学生に説明する。 ・プロジェクト学習の課題設定、進行管理等を徹底させる。
		2 新技術、新品種に係る技術習得	2 新技術（ジョイント栽培）、新品種（新甘泉）等を積極的に導入を進めている。また、電動農機具も取り入れて、作業性の向上を進めている。	2 ・参加した研修、視察のレポート提出	2 ・新品種研修会、ジョイント仕立て研修会、現地視察等への参加（3回程度／年）。 ・現地の実践ほ場を視察し、また、参加した研修会で学んだ技術を本校の新品種、ジョイント栽培樹等で実際に行い、知識、技術の深化を図る。
		3 GAPの取組	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 平成30年度、令和元・2年度に梨でグローバルGAPの認証を取得した。	3 ・リスク改善による適合基準達成割合：100%（模擬審査合格）	3 ・生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策について前年の取組の改善を図るとともに、新たに追加する事項の有無について学生を主体にしながら検討する。 ・学生に主体性を持って関わらせるため、GAP責任者を設けて活動を行う。

課題番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
		【野菜】 1 栽培基礎技術の向上とプロジェクト学習による実践力の養成	1 コースの学生のうち、農業高校以外の出身者で、非農家の学生が大半であるため、農業に関する基礎知識及び基礎技術の習得支援が必要である。	1 - 理解度アンケートで、野菜に関する栽培基礎技術に関する項目について「できている」以上の評点が80%以上。 - 農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級100%	1 「1年次」 - 鳥取県の主要品目である白ネギ、スイカ、トマトは春～夏に全員で管理を行う。 - 各自の希望と習熟のバランスを考慮して、春作はグループで、夏作以降は一人で品目を担当、年間一人4品目の程度の栽培担当を経験する。2年次のプロジェクトに向けて簡単な試験を実施し、調査とまとめの方法を習得する。 - 施肥量、農薬の計算方法、一般的な野菜栽培の基礎知識、主要品目の栽培方法習得のためゼミを実施、小テストなどを活用しながら早期理解を促す。 「2年次」 - 各自の進路事情等を考慮したプロジェクト課題を設定し、これに対応した品目を担当させる。 - プロジェクト課題はほ場の準備から収穫終了までの長期的な管理計画を立て、ほ場準備から収穫までの栽培管理及びとりまとめを行う。 2年生は、1年生に対してハウス管理等の適切な指示ができるよう、補佐を行う。 ※栽培品目や工程が多いことから、栽培技術の重点項目について、進捗状況を点検しながら、指導を進めることとする。
		2 県内先進農家、先進地及び試験場視察	2 野菜コースでは、現地の新技術（管理、品種等）を積極的に導入している、また、産地課題の解決プロジェクトに取り組む学生もいるため、現地の栽培管理状況を理解する必要がある。 さらに、現地ではスマート農業の導入が進むことが考えられ、新技術と併せてスマート農業先進農家の状況も理解する必要がある。	2 理解度アンケートで、鳥取県主要品目の現地状況について「理解できる」以上の評点が80%以上。	2 - 鳥取県主要品目を中心に先進地視察を2回以上実施する。 想定する品目(白ネギ、ブロッコリー、スイカ、トマト、ミニトマト、ホウレンソウ、イチゴ等) - スマート農業に適應できる人材育成のため、環境モニタリングや、自動制御、スマート農機等、スマート農業に関する視察を行う。 - 非農家出身者や普通科出身者が、農家の実地を経験し就農意欲を高めるため、1年次から産地体験会への参加や農家体験を実施する。
		3 GAPの取組	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和2・3年度に白ネギでグローバルGAPの認証を取得した。	3 - リスク改善による適合基準達成割合：100% - 理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できる」以上の評点が80%以上	3 - 生産工程におけるリスク点検、評価及び改善策の検討について、学生主体の取組とするため、学生内でグループを作り、役割分担をしながら改善活動を実施する。 - 野菜の品目を限定せず、圃場、関連施設でGAPの取組を継続する。 - 栽培管理システムを導入、出荷調製の記録や在庫管理をPC管理でシステム化し、効率化とリスク管理強化を図り、専攻運営の効率化も狙う。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
		【花き】 1 栽培基礎技術の向上と需要期を意識した栽培管理の習得	1 近年、非農家出身者が多いため、農業の基礎知識等を習得させることが重要となっている。その上で、花き栽培基礎技術の習得を目指し、さらには、新技術や本県に適する新品目について、積極的に学び、検討することにより、栽培技術の向上を図る必要がある。	1 - 理解度アンケートで花きの栽培基礎技術に関する項目で「できている」以上の評価が80%以上。 - 農業技術検定 1年次：3級100% 2年次：2級 50%	1 ①農業一般の基礎知識等支援 - 農業一般の基礎知識等を習得させるために、ゼミや小テストを月1回実施。また、春と秋には集中的に農業技術検定の過去問を勉強し、基礎知識の定着を図る。 ②花き栽培技術等支援 - 鳥取県の主要品目であるストック、シンテッポウユリ、花壇苗を中心に栽培管理を行わせて基礎技術の習得を図る。 - 毎週1回全員でコース内圃場を巡回し、生育状況の紹介や質疑応答を行う。 1年次は秋冬作型のハウスを担当し、日々の管理や観察を行わせるとともに、簡易な調査を実施して次年度のプロジェクツの練習とする。 2年次は自身のプロジェクト課題の品目の作業計画から準備、栽培管理を行わせ、同時に調査・とりまとめの進行管理を徹底する。
		2 外部研修会等への参加、先進農家・関係施設への視察、花育等	2 県内は地域ごとに特色のある花き生産が行われており、年に数回主要品目の栽培研修会が開催されている。 また、花き振興などのために、毎年「花のまつり（鳥取県花き振興協議会主催の品評会）」が開催され、県内の生産者が技術研鑽を図っている。 さらに地域の幼児や児童に、寄せ植えをとおして花を知ってもらう「花育」活動を実施している。	2 理解度アンケートで、鳥取県主要品目の現地状況について「理解できる」以上の評価が80%以上	2 ①研修会への参加 - 県内で実施される花きの栽培研修会に積極的に参加し、産地の現状や生産者の栽培状況を理解させる。 ②先進農家・関係施設への視察 - 県内の先進農家や、園芸試験場・花回廊等を視察する。 ③花き品評会 「花のまつり」（鳥取県花き品評会）に出品して生産者の出品物と比較し、理想的な栽培・出荷技術の研鑽を図る。 ④「花育」活動 「花育」活動を通じて学生自身も花に対する知識等を深め、プレゼン能力の向上を図る。 「花育」活動 1回 等
		3 GAPの取組	3 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和3・4年度にパンジーでグローバルGAPの認証を取得した。	3 - リスク改善による適合基準達成割合：100%（花壇苗） - 理解度アンケートでGAPに関する項目について「理解できている」以上の評価が80%以上	3 - 生産工程におけるリスク点検・評価・改善策を、学生主体で取り組む。 - 年数回教育訓練を行い、作業手順の確認を行う。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
		【作物】 1 作物栽培（水稲、大豆）の基礎技術の習得	1 水稲の基礎栽培技術を圃場管理を通じて習得する。	1 ・理解度アンケートで水稲の栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	1 各学生が圃場1筆を責任をもって管理することにより、水稲の基礎技術の習得を図る。 水稲栽培では、2年生のプロジェクト学習等により、奨励品種（コシヒカリ、ひとめぼれ、星空舞、きぬむすめ）や新品種「ZR1」の栽培実証により基礎技術の習得を図るとともに、増収・品質向上対策など現地で必要とされる新技術、重点技術への見識を深める。 大豆栽培では、転作の基幹作物の基礎技術を習得していく。 スマート農業等新技術に関しては、プロジェクト学習や先進農家視察、高大連携等を通じて技術知識を習得を図る。
		2 農業機械操作技術の習得	2 水田作では主要作業をトラクター、田植機、コンバイン等の農業機械を活用しているが、入学当初の学生は、機械操作の経験がない。	2 ・理解度アンケートでトラクター、田植機、コンバインの操作に関する各評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	2 学生の機械操作技術の習得を図るため、農大の管理ほ場面積を維持し、機械作業量を確保する。
		3 有機栽培技術に関する基礎知識の習得	3 有機栽培に興味を持って入学する学生はあるが、具体的な栽培管理は未経験である。	3 ・理解度アンケートでの有機栽培技術に関する項目で「できる」以上の評価が80%以上。	3 有機栽培、無農薬栽培のほ場を設置し、栽培技術の習得及びメリット、デメリットの理解を図る。
		4 白ネギ、ブロッコリー等転作野菜栽培のに関する基礎知識の習得	4 農業法人へ就農する学生も複数あり、水田農業の複合経営で一般的に取り入れられている白ネギやブロッコリー等露地野菜の栽培管理について基礎知識が必要である。	4 ・理解度アンケートでの白ネギ、ブロッコリーの栽培に関する評価項目で「できる」以上の評価が80%以上。	4 白ネギ、ブロッコリー等露地野菜を栽培することにより、栽培の基礎知識を習得する。
		5 GAPの取組	5 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。農産物生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和5・6年度に水稲（収穫まで）でグローバルGAPの認証を取得した。	5 ・R8（4年目）はR7に引き続きコンサルタントによるグローバルGAP模擬審査の合格	5 リスク点検、評価及び改善策の検討などについて、コース内で役割分担し、全員で連携して改善活動に取り組む。 水稲ほ場及び関連施設でグローバルGAPの認証後も継続してGAP推進活動を行う。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
		【畜産】 1 家畜（牛）の飼養管理、繁殖生理に関する基本的知識及び技術の習得	1 近年、畜産コースの学生の多くが非農家出身であり、また農業高校以外の出身者の割合も増える傾向が見られるため、まずは牛に慣れ、基礎的な知識・技能を重点的に習得させることが重要と思われる。	1 ・能力評価（A～D）により、牛の管理技術についてB評価以上70%以上を目指す。	1 牛の行動や採食量等をしっかり観察させ、健康と異常をチェックできる目を養う。特にエサの給与量の切り替えと繁殖管理を学生主体で重点的に実践する。 また、農家視察の充実を図り、農家から直接話を聞き、現場の飼養管理方法を見ることで、農家に近い感覚を身につけるようにする。
		2 機械等の操作技術の習得	2 現在、畜産農家・法人からの雇用人材を求める声が非常に高い。特に管理用機械、飼料用作物関係機械の操作技術を習得した人材が求められている。	2 ・能力評価（A～D）により、TMRミキサー、ホイルローダー、搾乳機械についてはB評価以上70%以上、飼料作物管理機械はB評価以上30%以上を目指す。 ・大型特殊やけん引以外の免許（小型車両系建設機械、フォークリフト等）について、将来的に必要な者の取得割合100%を目指す。	2 ・飼料の調製と給与、糞や敷料の搬出・運搬、堆肥化、搾乳作業など日々の飼養管理により機械操作の習熟を図る。 また、飼料用作物関係機械（堆肥及び肥料散布～収穫、調製作業）については体験実習を実施する。 ・就農・就職先での作業に対応できるよう、必要な免許を取得することを奨励する。 ・1年次から「小型車両系建設機械運転業務特別教育」を受講させ、資格を取得させる。
		3 牛の体型評価能力の向上と誘導技術の習得	3 乳牛及び和牛共進会に積極的に参加することで、優良な牛を見る目を養うとともに誘導技術の習得を行っている。	3 各共進会での上位入賞 ・和牛（中部畜産共進会、鳥取県畜産共進会） ・乳牛（中部酪農祭、鳥取県畜産共進会、B&Wショウ）	3 共進会の出品牛の選抜および調教、出品準備作業を学生主導で実施する。全ての学生が年1回はリードマンを経験するようにしている。
		4 GAPの取組	4 国際化している農産物市場に対応できる能力を身に付けることが必要となっている。生産物の生産工程管理に係るGAPの基本理念や考え方等の習得を通して、国際情勢に対応し得る学生の育成を図る必要がある。 令和6年度に牛の生産工程全般（和牛、乳牛、生乳、自給飼料）でJGAPの認証を取得した。	4 JGAP畜産の運用継続	4 ・外部コンサルによる年4回の講義を実施し基礎的な知識の習得に努める。 ・コース内で定期ミーティングを行い現場での運用状況の確認を行う。 ・外部コンサルによる年1回の内部監査を学生が対応して行う。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
6	学生の農業機械操作技術の向上	1 大型特殊免許とけん引免許の取得	1 就農や農業法人へ就職を目指す学生にとっては、トラクター、コンバイン等の大型農業機械の運転操作が必須条件であり、大型特殊免許の取得が必要。また水稻・畜産関係へ就農や農業法人へ就職を希望する学生は、けん引免許の取得も必要となっている。	1 ・1年生の大型特殊免許の合格率(100%) ・1年生のけん引免許の合格率(100%)	1 試験日までの練習期間が限られているため、練習日を計画的に設定する。(練習は、効率よく交代を行い1人当たりの練習回数を十分確保する) ①大型特殊免許 6人/日、練習回数4回～5回/人 乗車回数12回～15回/人 ②けん引免許 5人/日、練習回数6～7回/人 乗車回数18～21回/人
		2 農業機械の操作技術の向上	2 卒業後に就農又は農業法人へ就職する学生は、刈払機やロータリー耕耘の運転操作は必須であるが、安全性の確保や操作の苦手な学生も見受けられるため、当該学生のレベルアップが必要。	2 ・確認試験の合格点達成率 草刈り(80%)、耕耘(80%)	2 農業機械の取り扱いに不慣れな学生に農業現場で使用頻度の高い、刈払機及びロータリー耕耘について補完的に追加実習を行う。 (指導対象学生は各コース担任と相談の上決定し、研修科指導職員の協力を得て指導する) ○刈払機(10名程度) ・重点指導期間(7月～11月)、実習(草刈り)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート ○ロータリー(8名程度) ・重点指導期間(7月～11月)、実習(耕耘)5回/人 確認試験(実技)、習熟度アンケート
		3 農業機械の点検整備技術の向上	3 使用する機械の操作技術の習得のみならず、その点検整備についても基本知識の習得と技術の向上が必要である。	3 ・確認試験の合格点達成率 知識(100%)、実技(100%)	3 使用機械の構造と点検整備の手法について学ばせる。 ・取扱説明書の重要性・点検整備の重要性を認識させる。 ・機械の取扱説明書の熟読、頻繁な確認による知識の向上を図る。 ・機械の点検整備(日常点検・定期点検)の反復による技術の向上を図る。(実技・確認)
		4 農作業安全意識の向上	4 農作業事故を未然に防ぐためには危険箇所、危険行為を事前に予測、把握することが重要であるが、学生にはその意識・知識が乏しい。	4 ・農作業安全関連授業の実施(2回)	4 農作業安全の授業を設定する。また、学生の事故防止につながる具体的事例を参考にしながら指導する。 ・農作業安全関連授業の実施(2回/6回) ・GAP関連講義の中で実施される校内危険箇所、行為を把握し、農作業事故の減少に繋げる。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
7	社会情勢に即応した実践教育の実施	1 実用性の高いプロジェクト活動の確保	1 農業現場での実用技術の習得並びに課題解決手法を習得する目的でプロジェクト活動（卒論）を実施している。 例年、プロジェクト成果数課題を農村青年冬のつどいや普及員活動事例発表会等で発表している。		1 課題解決手法の習得を意識するとともに、生産現場のニーズに応えられ、学生が就農後に活用できるプロジェクトの完成を支援する。
		2 資格・免許取得	2 卒業後の就農（自営、雇用等）に即応するため、大型特殊・けん引免許の他、様々な資格・免許取得を推奨し、取得支援を行っている。	2 ・大型特殊・けん引免許（農耕車限定）以外の資格・免許取得者割合50% ・日本農業技術検定合格者割合60%	2 資格・免許取得者数、取得資格・免許数を確保するため、資格試験情報をきめ細かく学生に周知・指導する。 フォークリフトは2年生の4月、小型車両系建設機械は1年生の5月、食の6次産業化プロデューサーレベル1は1年生の7月、レベル2は1年生の10月に資格試験に挑戦しやすいようカリキュラム編成に配慮した。
		3 地域社会活動への参加	3 1、2年生ともに履修内容に地域貢献活動（ボランティア）を盛り込み、地域社会の一員としての自覚の醸成を図っている。また、近年、コロナ禍でイベントなどの交流の機会が少なく、コミュニケーションが苦手な学生もあり、コミュニケーション能力の向上が必要。	3 ・地域ボランティアへの参加（1回）	3 地域貢献に対する意識啓発とボランティア活動への積極的参加を促す。また、コミュニケーション能力向上に向けた講座を設ける。

課題 番号	課題	評価項目	現状	評価指標	具体的方策
8	多様な研修制度の運用と研修生のニーズに即した就農支援の実施	1 関係機関との連携による進路調整	1 アグリチャレンジ科は、農業に関する基礎訓練として定着し、各機関の就農相談においても、農業未経験者に第一に促す研修として浸透してきた。令和5年度からは大特免許取得の機会を盛り込み、研修生の技能アップを図っている。 研修生の進路調整を進めていくにあたっては市町村、普及所、JA、担い手育成機構等関係機関との情報共有および意識統一を図っている。	1 ・アグリチャレンジ科 就農率70%	1 雇用就農意向の研修生の就職に向けて、研修調整員による研修生情報および雇用可能な経営力を有する経営体情報について関係機関と共有することに一層努め、円滑な連携を図る。
		2 研修の周知	2 スキルアップ研修の研修生は減少傾向にある。また、アグリチャレンジ科は、近年の雇用情勢により受講生が少ない傾向である。 本校研修を経て独立自営就農した方、アグリチャレンジ科受講をきっかけに雇用就農に至った方等、近年で様々かつ優良な就農事案が生まれている。	2 ・研修生の確保	2 ・各種機会を活用し関係機関への再周知を図り、就農相談時に研修制度を適切に提示していただけるようにする。また、JA・市町村・移住部門の協力を仰ぎ、募集時期をとらえた各広報誌への記事掲載やHPやSNSでの情報発信を行う。 また、県内外での（雇用）就農相談会、ふるさと鳥取県定住機構のイベント等へ出展し研修制度のPRを行う。
		3（GAP関連）研修拠点施設の適正管理	3 スキルアップ研修野菜専攻の拠点施設である農業学習館は、栽培管理に係る資材・小農具・出荷資材・各種工具などを保管するとともに、毎日出荷調製作業を行う場所として日々の整理整頓の徹底・リスク管理等について、自営開始を志す研修生に意識付けのために活用している	3 ・出荷調整作業におけるリスク点検及び改善箇所の検討	3 農業学習館内は自営就農する研修生に合わせて、出荷調製作業におけるリスク点検及び作業性を考慮した物品の配置等の変更、改善を実施し、研修終了後スムーズに作業実践できるようにする。